

僕の居場所

山川小学校 六年

僕は、一人のさみしさを知っています。なぜかというとなら友達と楽しく過ごす時間がいっぱいあるはずの学校で一人だったからです。

ずっと父さんとお母さんに「学校に行きたくない。」と伝えていたけれど、お母さんたちは「学校での事は先生にお話してみてもいいよ。」と言ってしばらくは無理矢理学校に行っていました。だけど朝、玄関から動けない日もいっぱいありました。

五年生のある日、僕は学校に居たくない気持ちがあふれてしまっていて、お母さんに学校に迎えに来てもらい、その次の日から学校に行けなくなりました。お父さんとお母さんは、学校に行けなくなっても家族以外の人との関わりがなくなるのは僕のために良くないからと、色々調べてくれました。

そして習い事の先生から教えてもらったフリースクールに行く事になりました。そこには、小学校から高校生までの人たちがいました。農園に行って、お店で売るための野菜を収穫したり、袋につめる作業をしたりしました。みんなで販売数を予想してキッチンカーでフランクフルトや肉まん、かき氷を売りに行くこともありました。そこで僕の考えたチーズバーガーが、キッチンカーの人気商品になり、うれしかったです。釣りに行って海の生き物について教えてもらったり、コンサートをしたり二十四時間駅伝に参加もしました。昼ごはんは庭でまき割りをして焼き鳥を焼いたり、釜でお米を炊いたりして毎日忙しかったけど、とても楽しかったです。

僕は、六年生から学校に行く決めていました。そこでフリースクールでは、学校に戻った時に僕が少しでも人との関係をうまくできるようにと、態度や顔、話し方で気をつける事を毎日のように怒られながら練習しました。それでも、学校とは違って「フリースクールに行きた

くない。」と思わなかったのは何でだろうと考えました。それは、たくさんの人が関わってくれて、話をしてくれて、僕は一人ぼっちじゃなかったと感ずることができたからだと思ひます。

学校を休んでずっと家にいたら、外に出る事が怖くなって、学校で嫌だった事ばかり考えてしまい、どんどん暗くなっていたと思ひます。一人の時間が必要な時もあるけれど、一人の時間とひとりぼっちは違ひます。

もし、一人ぼっちで寂しそうな人が僕の近くにいたら、僕は声をかけるようにしていきたくひです。